

「第四幕：このままでは最大の軍備をしても国は守れない」「第五幕：エピローグ」《日米国民の防衛意思の差異》

	米国	日本
P530 ～531	大学における軍事教練への志望者の多さ＝「アメリカの青年には自国を守る意思と情熱があるらしい」	「国民に納税、子弟教育の義務はあつても国家を守る義務は全く無い」。国防を、「安保只乗り」で米国人の傭兵を使ひ、金で済まそうとする「人身売買的」発想。
P532		日本国憲法（平和憲法）は、「安保只乗り」をして「経済大国」になる為の盾。
「エピローグ」 国家がなす自己欺瞞。及び、砂上の楼閣（虚像）への適応が招く人格崩壊と精神的退廃 P535		「時間待ち改憲論」「必要の前に法律の解釈は無限に自由」と言ふ日本の欺瞞と偽善・・・国民の、法と政治に対する信頼感の喪失を招く。 さうした欺瞞と偽善の日本国憲法（平和憲法）への強要適応は、国民にコンシャンス（良心・自覚）への求心力を失はせ、終には人格崩壊、精神の退廃を招かしめる。と恆存は言ふ。
日米の差・・・「過去の歴史と大自然の生命力（時間的・空間的全体：吉野注）に繋つてゐる」意識を持つてゐるか ないか	右記文：日本の「現代の人間に最も欠けているものはその明確な意識ではないか」云々のいはゆる「時間的・空間的全体感」が米国民や西欧人にはあり、それは取りも直さず「神」なのである。故に「神に型どれる人間の概念の探求」として、自由と民主主義を護持する事の証明が、「アメリカの青年には自国を守る意思と情熱がある」と言ふ事に繋がるのではなからうか。と恆存は言つてゐるやうに聞こえる。	「問題は、すべてはフィクションであり、それを協力して造上げるのに一役買つてゐる国民の一人、公務員の一人、家族の一人といふ何役かを操る自分の中の集団的自己をひとつの堅固なフィクションとしての統一体たらしめる原動力は何かといふ事である。 それは純粋な個人的自己であり、それがもし過去の歴史と大自然の生命力（時間的・空間的全体：吉野注）に繋つてゐなければ、人格は崩壊する。現代の人間に最も欠けているものはその明確な意識ではないか」 <b>重要</b>

